国際中等教育研究　第７号 p.99 ～ 111
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

保健体育科の取り組み

Initiatives in Health and Physical Education

保健体育科
板村邦弘　加藤英明　深澤祐美子　大川健介

要旨

現代社会における人間関係の構築や国際化に対して、保健体育科としてどのようなアプローチができるかを考えた。多様性を理解させる手段として、また文化としてのスポーツを知ることを通じて、スポーツの楽しさを味わい、創り上げていくための資質や能力を育てていくことができればと考えた。その中で、今回はゴールボールとクリケットの実践を行った。

１．保健体育科における「グローバルな視野と能力を持つ生徒の育成」とは

（１）グローバルをどのように考えるか

現代では、インターネットや携帯電話などさらにはオンラインゲームによって、「人とつながる」「人と協同する」「社会をつくる」ことが容易にできる。この点からみれば、仮想社会の中では一見、人とつながることが簡単にできるように見える。しかし、このような関係の中には、相手に配慮を欠いた言葉や発言が勝手気ままに飛び交いやすいという現状もある。

しかし、学校教育の存在は、生身の身体をもつ人間同士が出会い、関わるということが仮想の世界とは大きく異なる点である。生徒は、学級や学年を通じて長期間にわたって共同生活を営む。声、表情、感情を持った多くの個人が存在する場で日常的に行われる[1]。また本校には、外国人子弟や異文化での学習経験を持つ生徒達が多く在籍している。その生徒達は、交流する中で他者の内的感情を読み取ったり、応対したり思いを共有したりする。また、時によっては連帯感や協力する心を生み出す。保健体育の授業では、身体活動を通じてこういった力を育てることができる。

（２）どのような視野と能力を育成するか

本年度の研究では、現状とは異なる未来を見据えて、乗り越えていく力を育てていかなければならないと考える。国内、国外を問わず様々な生育歴の中で子どもたちの「価値観や行動、ライフスタイル」の変容を通して持続可能な学校づくりを推進し、持続可能な共同体（コミュニティー）を足元から広げていくことが今後の教育の中で必要であると思われる。

体育授業においては、様々な生徒と相互交流、相互啓発を含め、男女別での授業、男女共習での授業などの実践を踏まえ、中等教育学校として六カ年の中で工夫をして指導している。

① 多様性（ダイバーシティ）を認めるコミュニケーション

多様性には「多種多様な状態または特性」と「つながり支えあっている状態」の２つの意味があるが、社会や企業・学校などの組織運営においては、「多様な文化的・社会的背景をもつ構成員の一人ひとりが、それぞれの持てる力を発揮して活躍できる状態」を指す[2]。個々人において内在するものを発揮できる状態を作り、それを受け取る人がおり、互いのやりとりや行動を大切にする過程を重視していく。海外留学・海外赴任、多国籍企業で働く際の「外への国際

化」や、地域の多民族／多文化社会化という「内なる国際化」への対応に「異文化間リテラシー（文化を読み解き、文化の違いと多様性に対処する力)」と「対話型コミュニケーション」の基礎スキルを学ぶ。スポーツは、健常者だけのものではない。行い方や用具を工夫することで、全ての人にその楽しさが味わえるものである。これもまた多様性の一種であると考えている。ノーマライゼーションなどの学習をする機会を持つことによって、様々な感性を持つ生徒に育って欲しいと考えている。

② 文化としてのスポーツを通して、学習と異文化理解を図る

文化はひとつの生きたシステムである。文化の意味や機能、全体構造を理解する際に役立つものとして、「見える文化」と「見えない文化」の分類がある。「触れる文化」と「触れない文化」、あるいは「物質文化」と「精神文化」ともいわれている。たとえば、衣食住などは「見え」て「触る」ことのできる「物質文化」であり、価値観や信条といった私たちの頭の中にある観念体系は「見る」ことのできない「精神文化」といえる。スポーツにもその武道の中には礼儀や相手を尊重する精神的な流れ、欧米のスポーツにおいてもプレイを共にするパートナーとしての精神的流れが、文化的背景として形を変えていても共通するものはある。ラグビーなどのノーサイドという言葉もスポーツの指導者であれば、その持つ意味を理解している方が多いと思われる。

生徒達は授業の中で、スポーツを通して様々な文化背景のもとでその見えない世界を知ることも重要であると考える。日本であれ、海外の学校であれ、生徒達は異なった思考、行動、価値観や世界観が存在するであろう。そこには様々な個人の表現パターンの中が現れるであろう。生徒同士で問題を共有し、個人やチーム等を活用することで理解を図る力を育てたい。

③ スポーツを知る

スポーツの起源は、そもそも様々な国や地域における民族的娯楽がスポーツへと変化してきた。もともとローカルなものがグローバル化してきたのである。民族的娯楽がスポーツへ変化していくプロセスをスポーツ化(sportization) である[3]とスポーツ文化のグローバル化についての研究者である Maguire は言っている。プロセスにおいては、近代社会への変容（インターネットの発達や自ら多くの人たちに発信することが容易になってきたことなど）が影響を与えている。スポーツの発祥においては、イギリスやアメリカから発信されたものが多いことは、周知されている。しかし、それらのスポーツは元々がグローバルに発信されたものでは無く、ローカルの中で発生した娯楽が、伝播する過程においてスポーツとして形を変えながら普及していったという経緯がある。まさにそれはスポーツが、ローカルなものから、グローバル化する過程にあったわけである。

スポーツは他国、自国文化のローカルな部分から発生した集合体である。帰国生や外国人生は、在外国での教育過程の中でスポーツや運動とのかかわりを学習してきている。それは、学びの履歴であり、日本の生徒とはまた異なるものであるのは当然である。

また、帰国生は運動、スポーツに対する意欲、関心、認知等に関わる部分においては一般生と異なるところがある[4]。一般生徒共にローカルなルールやスポーツ実践の方法などを創り上げていく過程の中で、スポーツを知り、味わえること、創り上げていく楽しさを味わえることができればと考えた。

２．本研究に対する授業実践

（1）1学年体育における取り組み 「ゴールボール」

①単元の扱いと授業形態について

本校では、国際社会の中で共生・共存する力を持った生徒の育成を教育目標の一つとしてあげている。すなわち体育において考えると、国や場所を問わず、また国籍や性別、年齢を問わず誰とでもスポーツを楽しめる力の育成を目指している。このような力を育成していくための一つの要素として、ノーマライゼーションの考え方が重要であると保健体育科では考えている。

また本校では、IBの提唱するAOI領域の1つであるコミュニティと奉仕のエリアに関連して、ボランティア活動に力を入れている。そこで保健体育科では、スポーツを行っていく上でのグローバルな視点の中にノーマライゼーションの考え方を基盤に置く立場から、毎年ウォーク＆ランフェスタ（難病や障害を持った方のスポーツイベント）の運営ボランティアへの参加を推奨してきた。昨年度はその会場で、ゴールボール日本代表チームのデモンストレーションを観戦できるとともに、選手の方に基本技能の体験をさせてもらい、ゴールボールを身近に感じる機会を得ることができた。このことが、この種目を授業の中に導入するきっかけとなった。

ゴールボールは、もともと第2次世界大戦で視覚に障害を受けた軍人のリハビリテーションプログラムとして1946年にドイツで考案されたものである。その後、世界に普及し、全プレーヤーがアイシェード（目かくし）をつけることで、視覚に障害が有る無しを問わず誰でも参加することができるような形式に発展していった。さらに、現在ではパラリンピックの正式種目に採用されており、また日本国内でも全国選手権が行われるようになってきた。

そこで本校では、この種目を視覚障害者のスポーツとしてではなく、視覚を制限した誰にでもできるニュースポーツとして扱い、その特性を生徒たちに楽しませることにした。また、授業形態については、男女別ではなく、クラス単位で行うことにした。これは、男女の体力や、怖さの感じ方などに性差があっても、コミュニケーションを密にし、互いに配慮しあうことで、男女合同でも練習や競技が成立すると考えたからである。また、こうした性差への配慮は、ノーマライゼーションを理解する上での1つの手立てになるであろう。

②対象

国際中等教育学校第1学年105名

1組：男子10名・女子16名，　2組：男子12名・女子15名

3組：男子10名・女子15名，　4組：男子13名・女子14名

③単元目標

1．視覚を制限した状態でのゴールの攻防を楽しむ。

2．視覚を制限し、聴覚・触覚を頼りにした状態での身体協応力を高める。

3．仲間とのコミュニケーションを深め、協力して活動する。

4．自分や相手チームの安全に留意しながら活動する。

④単元計画

MYP 単元クエスチョン　（Unit Question）

①視覚に頼らずにどのように運動するのか。

②仲間と、どのように協力するのか。

次数	単元のテーマ	学習内容
1次 ・ 2次	○オリエンテーション ○グループ練習 ・目をつぶってボールを取ってみよう。 ・目をつぶってボールを止めてみよう ○グループ内での簡単なゲーム	・授業の内容や、進め方、グループを聴く。 ・転がってきたボールを目をつぶって取る。 ・転がってきたボールを体全体で止める。 ・転がってきたボールを目をつぶって体全体で止める ・守りの時だけ、目をつぶって行う。
3次 ・ 4次	○グループ練習 ・目かくしをしてボールを取ってみよう。 ・目かくしをしてボールを止めてみよう ○他のグループとの簡単なゲーム	・転がってきたボールを目かくしをして取る。 ・転がってきたボールを体全体で止める。 ・守りの時は、目かくしをする。
5次 ・ 6次	○グループ練習 ・目かくしをしてボールを取ってみよう。 ・目かくしをしてボールを止めてみよう ○他のグループとの簡単なゲーム	・転がってきたボールを目かくしをして取る。 ・転がってきたボールを体全体で止める。 ・守りの時は、目かくしをする。 ・攻撃の時も目かくしをする。 ・目かくしをしている味方をグループでサポートする。

⑤評価

○運動の構成・・・チームで協力して、練習方法や試合の作戦を組み立てることができたか。

○運動の技能・・・目隠しをした状態で、効果的な攻撃や防御を行うことができたか。

○社会的スキルと個人の関与・・・グループ内でコミュニケーションを図り、協力して課題に取り組むことができたか。また、個人の役割を果たすことができたか。

⑥授業アンケートの結果

授業後に対象生徒にアンケートを実施し、この種目がカリキュラムとして有効であったかと指導内容が適切であったかを振り返る参考とした。質問項目は、以下６項目であった。

Ｑ１．ゴールボールは楽しかったですか。

Ｑ２．ボールの音を何回目から聞き分けられるようになりましたか。

Ｑ３．ボールをうまく止める工夫ができましたか。
Ｑ４．授業の回数（6 回）はどうでしたか。
Ｑ５．チームの仲間とコミュニケーションがとれましたか。
Ｑ６．目かくしをしてやってみた感想を書いてください。

アンケートの結果は、以下のようであった。

図１

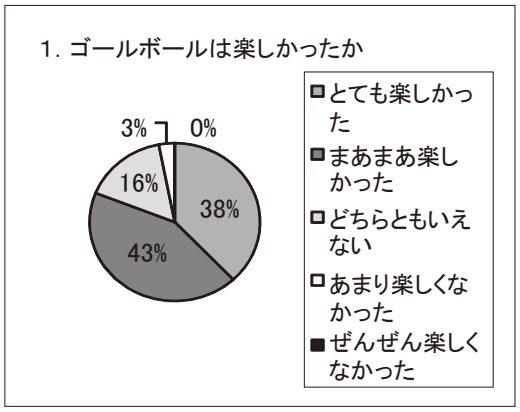


図２

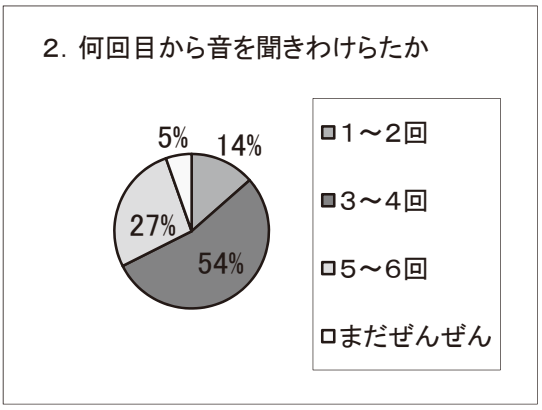


図３

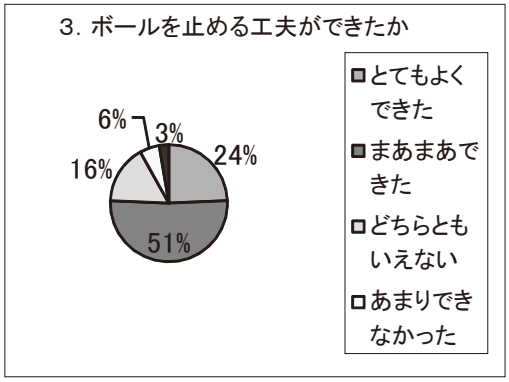


図４

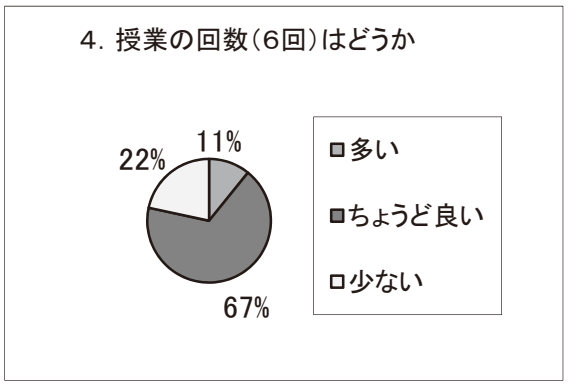
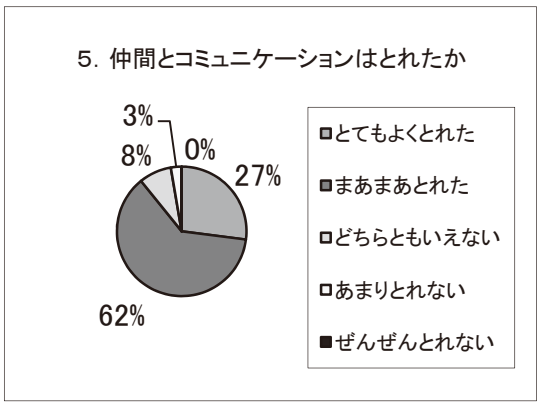


図５



記述欄の回答については、以下のようであった。

Ｑ１．ゴールボールは楽しかったですか？

〇楽しかった理由

・緊張感がある
・運動能力が低くてもできる
・チームで協力することができる
・音だけで反応する楽しさ
・普段とは違う感覚
・視覚障害者の気持ちに触れることができた

〇楽しくなかった理由

・数回で飽きた
・けがをしそうで怖かった
・指示に従い、目隠しをしている人とそうでない人がいて平等な条件、同じ体験ができたわけではなかった
・音を聞き分けて行動することは難しかった
・顔にあたったり、擦り傷ができて痛い
・運動量が少ない

Ｑ３．ボールをうまく止めるくふうができましたか？

〇できた理由・ポイント

・低い姿勢で構える
・手だけではなく、足も使う
・体をうまく使う（セービング）
・コートの端から中央に向かって動く
・中央に構えて音を判断して止める
・座った姿勢から手を出す
・二人がぶつからないように前後にポジショニングする
・試合前にポジションについて２人でよく確認しておく

〇できなかった理由・ポイント

・怖くて体を使えなかった
・音のしにくい投げ方への対応が難しかった
・他の班の音が耳に入ってきてしまった

Ｑ５．チームの仲間とコミュニケーションがとれましたか？

〇とれた理由

・良いプレーを褒めあった
・練習などでお互いに指示ができた
・失敗した時に互いにかばいあった
・ボールの止め方について意見を出し合った

・ポジショニングなどについて指示し合った
・ペアで声の掛け合いがよかった
・コート分担の仕方がよかった

○とれなかった理由
・ミスに対するフォローができなかった
・ゲーム中はコミュニケーションしにくかった
・班にまとまりがなく、勝手な行動が目立った

Ｑ６．目隠しをしてみた感想は？
・少し怖かった
・ボールに対する恐怖心があった
・自分で目を閉じるよりも目隠しをすることがはるかに怖かった
・周囲の雑音が気になった
・最初は恐怖心があったが、慣れてくると音に集中できた
・音に集中することによって意外とボールの位置がわかることに気付いた
・見えない分、仲間と協力し合えた
・全員が同じ条件だったので、努力しがいがあった
・アイデアが重要であると感じた
・目に障害があっても取り組める素晴らしいスポーツだと感じた
・自分の健康に感謝した
・聴くという行為の大切さがわかった
・視覚障害の方の苦労が理解できた
・視覚障害の方の苦労を知り、今後何かの役に立ちたいと思った

⑦継続的振り返りと評価

MYPの継続的振り返りと評価に従い、上記のアンケート結果を参考にして、このカリキュラムの振り返りと評価を行った。

＜生徒と教師＞

①　何が魅力的だと思ったか？
・目隠しをして、音を頼りに攻撃したり守ったりすることのスリルと難しさに普段では感じられない魅力があった。また、視覚が制限された分、仲間とコミュニケーションを密にとって活動することに、普段味わえないような楽しさと満足感を感じられること。

②　学問分野別の知識とスキルは、その実力を試されるような場面があったか？
・グループ練習の場面と他グループとの毎回の試合の中で、大いに体験する場面があった。

③　学習を通して、どのような探究が生じたか？どのような発展的活動が始まったか？
・目かくししてのより良い攻撃方法と防御方法の探究。また視覚を制限した分、仲間との密な協力が必要となるため、コミュニケーションを活発にとるようになった。

④ 単元と自己の学習の両方について、どのように振り返ったか？

・毎回の振り返りは、個人カードと班の学習カードに記入して振り返りを行った。

・単元の振り返りは、生徒全員に事後アンケートを取って行った。

⑤この単元を通じて、IB の学習者像のどの特質を取り上げて働きかけをしたか？ 生徒が自主的に行動するために、どのような機会があったか？

探究する人・コミュニケーションができる人

・視覚以外の感覚を用いて運動する方法をグループで相談し、練習の中で探究していった。

・毎回のチーム練習や他のグループとの試合の中で、視覚を制限することで仲間と普段以上に多くのコミュニケーションを図り連携を高めていった。

＜可能な関連づけ＞

① 自分が担当する教科群の他の教師や他の教科群の教師達ときちんと連携できたか？

② 他の教科との連携を通じて、どのような学際的理解が形成されたか、または形成が可能だったか？

・今年度初めて取り入れたカリキュラムなので、今年度はほとんど連携できなかった。来年度以降の課題としたい。

・ノーマライゼーションに関する部分は、国際教養との関連を図っていけたらと考えている。

＜評　価＞

① 生徒は、自己の学習を明確に表すことができたか？

② 各単元用に設定された学習目標について、その評価課題によってどの程度生徒の達成度を推し測れるのか？

③ 評価規準項目のどのレベルにも生徒が到達可能になっているかをどのように確認できたか？

④ 次の段階に向けて準備は整っているか？

・生徒は毎時、個人カードの自己評価欄で個人のできばえを評価し確認していった。また個人カードを反省をもとに、次時の目標を各自で立てさせた。

・学習目標に関しては、毎時の単元計画に示された通りであった。細かい評価項目に関しては今年度のデータをもとに今後検討していきたい。

・単元の途中に、できばえの個人差が大きくなってきた段階で、各個人に適切な到達目標が示せていたかは、疑問が残る。

・本単元が初めてであったため、今年度の成果をもとに来年以降より良い目標設定ができるように準備していきたい。

＜データ収集＞

集めるべきデータをどのようにして決定したのか？ それは役に立ったか？

・最初のデータは、昨年度のウォーク＆ランフェスタでの全日本チームのデモンストレーションを観戦したことから始まる。また、その時に収めた写真や動画を参考にした。

・インターネットから、ルールや用具を検索し参考とした。

・事後であるが、夏休みにパラリンピックが開催され、、ゴールボールがたびたび放映されていたものを記録し参考とした。大いに役立った。

⑧最後に

・授業後のアンケートでは、80％以上が楽しさを感じていた。種目としては多くの魅力を持っていると言えよう。

・目隠しをしておこなうため、生徒たちがうまくできるかどうか不安であったが、３～４時間で約 70％、６時間で 95％がボールに反応できるようになった。だが、視力を制限して運動することに不安を感じる声も少なからずあるため、不安を持たせないような指導方法を確立していく必要がある。

・フロアに寝そべって防御する方法（セービング）が最も有効であるが、特に女子にはこの体制をとることに怖さを感じるものが多かった。また、セービングした際にボールが顔に当たり、負傷する例があったので、けがをしないような技術指導が必要である。

・授業回数に関しては、今回は６時間扱いであったが妥当であったと感じている。全力でボールを転がすと相手が怪我をしたり、怖がったりしてしまうため、今回は手加減して転がすように指示した。また、目かくしして動くことに慣れていないため、思い切って動き回ることができないものもいた。これらのことから、運動量という点では、不足を感じる生徒も多かったと思う。

　活動量の点で、安全性を維持しながらどのように増やしていくのかが、今後の大きな課題であろう。

・コミュニケーションという点では、視覚が制限されることで、今まで以上にグループの仲間や相手チームの選手とのコミュニケーションの必要性が高まることが期待できる。コミュニケーションの活性化という点では、大いに期待できる種目である。

以上のことから、この種目が持つ特性に対する指導としての工夫と、生徒が運動に対する様々な工夫をする余地はまだまだ多く残されていることがわかった。初めて導入した種目であったが、この単元の持つ有効性と発展性は高いと考えられる。今後さらに検討していく必要があろう。

参考資料：ja.wikipedia.org/wiki/ゴールボール

（２）６学年体育における取り組み「クリケット」

①クリケットを選んだ趣旨と教材としての有用性

　現在国際的に行われているスポーツは、オリンピック種目にとどまらず、数多く存在する。なかでも「近代スポーツの母国」と言われているイギリス発祥のスポーツは多い。人口的にみると、サッカー・テニス・ゴルフなどが多く、世界的にも有名ではある。それと並んで英国文化圏（オーストラリアやインド等）を中心に親しまれているのがクリケットだ。現在では、英国圏だけでなく、オセアニアやアフリカ、ヨーロッパと広く親しまれている（ベースボールの発展しているアメリカ大陸では盛んではない）。インターナショナル・クリケット・カウンシル（ＩＣＣ）には、2011 年度 105 か国の国と地域が加盟している国際的なスポーツであるが、しかしながら日本ではまだまだマイナースポーツである。

そもそもクリケットとは、イギリス発祥の近代スポーツの中でも、歴史的には古い存在である。日本には、明治時代にイギリス海軍兵士たちによって持ち込まれた。外国人の間では親しまれていたが、本格的に日本人に普及し始めたのは、ここ最近のことといえよう。1980 年に初めて社会人クラブが誕生し、1984 年に任意団体日本クリケット協会が発足した。正式な試合は 5 日間にも及び、ティータイムやランチなどをはさみながら行うスポーツである。現在では、普及のために時間を短縮したいくつかの試合形式が存在しており、時間単位で行うもの、アウトの数が決められているもの、と様々である。

今回クリケットに着目したのは、国際的には盛んであるクリケットに親しむことと、野球型スポーツとしての教材化の可能性について検討してみようと思い、クリケットを選んだ。

現在、学習指導要領で示されている野球型のスポーツといえばソフトボールがある。しかし、道具（特にバット）面の操作のしやすさといった点において、男女の差が大きく、特に女子にとっては難しい競技である。クリケットは、道具面においてバットが平たく軽いことなどや、素手でボールを扱うなど、女子生徒にとっても操作性のしやすさから、より一層楽しさを感じる場面が増えるのではないかと考えた。また、ルールのカスタマイズのしやすさも教材としては面白い。特に高校 3 年生ともなると、自分たちで状況を考えて、より多くの人が楽しむことができるルールを考えようとする。この能力は、本校の体育科の目標である、自らで運営できるようになることや、コミュニケーション能力の育成といった点において、非常に有用であると思われる。また、これはイギリススポーツ全般に言えることだが、クリケットがスポーツマンシップやフェアプレイ精神といった、スポーツに関わる精神文化も尊重していることも、教材として非常に有効であり、今回クリケットの教材化を試みようと思った理由の 1 つにあげられる。

②対象

国際中等教育学校 6 年生　選択者 18 名(男子 9 名・女子 9 名)

③単元の目標

（1）クリケットの基本的な技術を身につけ、ゲームの中に生かしていく。

（2）自己やチームの課題を見つけ、皆で協力して問題解決をはかる能力を育てる。

（3）ルールの工夫をし、誰でも簡単に楽しめるようになる

④単元計画（全 8 時間）

次数	単元のテーマ	学習内容
1 次 ・ 2 次	○オリエンテーション ○道具に慣れる。 ○キャッチボール・バッティング練習 （まっすぐ打つ）	・授業の内容や、進め方、グループを聴く ・バットの特徴を知る ・ティーに乗せたボールを打つ

３次 ・ ４次	○ルールの詳細説明 ○ボウリング練習（ピッチング） ○バッティング練習（左右に打つ） ○ミニゲーム	・本来のゲームの進め方を知る ・肘を伸ばして投げる練習を行う ・前後左右に打ち分ける
５次 ・ ６次	○授業におけるルールづくり ○簡易ゲーム（8 対 8）	・本来のルールでは時間内に終わらないため、授業用のルールを考える。（アウトの数や投手の交代について）
７次 ８次	○ルールの修正を行う ○ゲーム（８対８）	・ペアーズクリケットを採用し、ゲームを行う。

⑤評価

（１）クリケットの技術が習得できているかどうか

（２）仲間と協力して活動できているかどうか

（３）ルールの修正などに積極的に関わっているかどうか

⑥授業でのルールの変遷

本来のルール	授業用ルール（中盤まで）	問題点
バッツマンはアウトになるまで打ち続けることができる	1 ラン以上したら次のバッツマンと交代	クリケットで重要なペア意識が欠如する
10 アウトでチェンジ	3 アウトでチェンジ	なかなかアウトにならなかったりチェンジまでの時間が読めない
1 オーバー（6 球）で投手交代	打者１人で交代（投球数に関係なく）	1 人あたり投球数がバラバラ
１人あたりの球数は決まっていない	1 人 5 球まで（暴投は含まず）	暴投が多く、時間がかかる
打ってもアウトになりそうな場合は走らなくてよい	1 人あたりの球数を決めたので、変更せず	走ることをあきらめがちになる

⑦授業を終えて

６年生で実施したため、バット操作やボウリングの個人技術については比較的早い段階で上達が見られたが、ルールについては、授業内で行う際の問題として以下の点が挙げられた。

１．チェンジのタイミングがバラバラ

２．50 分という限られた中では、打順が回ってこない可能性があった

３．１人当たりの投球数が違う。

４．打つチャンスの少なさ

そこで改善策として取り入れたのが、「ペアーズクリケット」である。このペアーズクリケットを取り入れたことで、限られた時間の中で一定の投球数・打席数を確保することができるようになり、全体としてクリケットを楽しめるようになった。

＜ルール＞

・1チーム８人・・・この中で２人組を４グループ作る。
・投げるペア・打つペアが一斉に交代する。
・ボウラーの持ち球は３球。バッツマンも一人当たり３球チャンスが与えられる。
・展開の中でアウトになった場合も、バッツマンは残りの球数打つことができるが、アウトになった数の分、点数からマイナスされていく。
・ボウラーが暴投したした場合は、手前に置いたティーに乗せてあるボールを打つことができる。

⑧全体的な反省

今回６年生で実施したが、女子においてその後に行ったソフトボールでのバッティングの技術が全体的に向上した。しかし男子にとっては、バッティングの技術が容易過ぎた点が挙げられるだろう。実際には男女とも２・３年生のソフトボールの導入として行う方が、適切であるかもしれないと感じた。ルールの工夫といった点においては、６年生でも十分に工夫の余地があった。２・３年生で実施するのであれば、ルールの変更を考えるのは難しいため、ペアーズクリケットを最初から導入すると、授業も盛り上がるのではないかと思う。

＜参考＞

※事前準備

生徒も初めて行うスポーツであるために、事前の学習を必要とした。課題として日本クリケット協会のＨＰ上の動画を参考に、ルール等の確認を行わせた。また、初日には日本クリケット協会から講師を迎え、大まかなルール説明を行った。

※道具について

ボール：日本クリケット協会から提供していただいたボールを採用。ない場合は、市販のカラーボールやテニスボールでも代用可。

バット：日本クリケット協会から提供していただいた。専用のものが必要。

ウィケット：日本クリケット協会から提供していただいた。ない場合はカラーコーンなどで代用可。

※正式なルールや競技説明などは、日本クリケット協会ＨＰhttp://www.cricket.or.jp/を参照。

Initiatives in Health and Physical Education

We considered what approach health and physical education can adopt to address the development and internationalization of human relationships in contemporary society. We hoped to develop students' competency and ability to appreciate and expand the enjoyment of sports by clarifying its cultural aspects and thus nurturing respect for diversity. Specifically, we sought to attain this objective through the practice of goalball and cricket.

＜参考文献＞

[1]学校教育は社会性の育成にどう向き合うべきか　藤原幸男　体育科教育 2012.03
大修館書店 pp.11
[2]未来をつくる教育 ESD　持続可能な多文化社会をめざして　五島敦子／関口知子
明石書店 pp.148
[3]文化としてのスポーツのグローバル化の複雑な様相　海老島均　体育の科学 vol.62/no.5
2012.5.1　杏林書院　pp325
[4]拙稿　本校カリキュラム改革調査研究３年次報告 1997　pp114